

「やなせたかし」と「のぶ」

2025年8月16日

我部山民樹

(かべやまたみき)

1. はじめに

NHKのテレビドラマ『アンパン』が放映中である。この番組を楽しみにしていた。かつて我が子が夢中になってテレビ番組の『アンパンマン』を見ていた。このような大ヒットを生み出したやなせたかし、やなせたかしを支え続けた妻・のぶ（以下暢）は一体どのような人物だったのだろうかと思っていた。筆者は四国の香川県出身でときどき帰省するが、その度にJRの四国中を走っているいろいろなデザインのアンパンマン列車を見かけるが、その都度、同じ四国出身のやなせたかしのことをもっと知りたいと思った。



話は異なるが、2023年1月26～28日に文化・芸術・スポーツなどの有識者150名ほどが市原市に集結し、様々なテーマに沿った講座やイベントが開催された『エンジン01 in 市原』（末尾の別紙参照）で、脚本家の中園ミホさんらの講座にて、中園ミホさんから、NHKの朝ドラ『アンパン』のオリジナル脚本を書き始めたばかりで3300名ほどの応募者の中から満場一致でヒロインが決定したばかりで近々発表されるとか、この脚本にかける意気込みとかを拝聴し、やなせたかしのことをもっと知ることが出来ると放映が楽しみだった。

筆者は、偉人が自由奔放で変わった人物が多いように思っているのですが、以前より大事を成した偉人より偉人を上手に支え続けた女性を主人公にした方が朝ドラは受けるのではないかと思っていたが、まさに『アンパン』はそれに当てはまる。しかし、放映が始まってみると、高知新聞社で知り合ったはずのやなせたかしと暢がおきな馴染みとなっているのに驚いた。しばらくして、二人の前半生をそれぞれ別々にドラマに組み立てるのには多くのハードルがあることに気がついた。が、それでは史実はどうだったのだろうか？それに同学年の暢が癌により75歳で死去、たかしは94歳まで長生きし、死の直前まで活躍している。ヒロインの暢が死去した時点でドラマが終了し、やなせたかしのその後の20年間ほど

の活躍がドラマに盛り込まれないかもしれないと思い、その二つについて調べてみることにして、市外の図書館を巡り、やなせたかしの著書 5 冊を借りてきて調べました。ついでに「困ったときのやなせさん」といわれ、多種の仕事で活躍し、ついには『アンパンマン』という大ヒットを生み出した「たかし」と支え続けた「のぶ」についてまとめてみたので御参照ください。

○暢

たかしが描いた月刊高知の表紙



2. 主な登場人物

名前	プロフィール
梁瀬崇（やなせたかし）	漫画家・絵本作家・詩人。有限会社やなせスタジオ社長。『アンパンマン』の原作者
梁瀬暢（やなせのぶ、出生時の姓は池田、最初の結婚後は小松）	梁瀬崇の妻、大阪の阿倍野高等女学校を卒業後、上京して日本郵船に勤務。そこで高知出身の小松総一郎と出会い、結婚。新婚早々、夫は徴兵により召集され、暢は終戦を高知で迎えるが夫は帰還後に病死、夫と死別後は高知新聞社に入社し、『月刊高知』の編集者となる。
梁瀬清	たかしの父親、高知県香美郡北町在所村（現香美市香北町）の梁瀬家の次男、梁瀬家は江戸時代から続く庄屋だが清の少年時代には家産は既に傾いていた。清は上海の東亜同文書院に留学し、日本郵船、講談社と転職して、東京朝日新聞の記者となる。中国の広東にて三十三歳で客死。
谷内保定	登喜の父親、高知県香美郡在所村永野出身、在所村の村長を務める地元の名家
梁瀬登喜（谷内）	たかしの母親、高知県立高等女学校卒
梁瀬千尋	たかしの弟、京都帝大卒業後海軍に入隊する
梁瀬寛	たかしの伯父（清の兄）
梁瀬治太郎	たかしの祖父、村長で大酒のみで酒を飲み過ぎて死去したとたかしは言う。

梁瀬鉄	たかしの祖母
池田□□	暢の父親、高知県安芸市出身、大阪に渡り当時の商社「鈴木商店」に勤務
池田▽▽	暢の母親
佐竹晴記	高知出身の社会党代議士。高知新聞の4人のスタッフが佐竹代議士に東京でインタビュー。暢が秘書になった代議士とされる
青山茂	高知新聞編集部の『月刊高知』の編集長
品原淳次郎	『月刊高知』のスタッフ、のちに高知放送の名キャスターとなる
猪熊弦一郎	戦後洋画界のモダン派の旗手。三越が包装紙のデザインを依頼。
永六輔	放送作家、作詞家、ポップソング『上を向いて歩こう』の作詞者
いずみ・たく	作曲家・政治家。元参議院議員（第二院クラブ）。
宮城まり子	人気女優であり、NHKの紅白歌合戦に8回も出場した人気歌手でありながら、芸能活動を事実上やめ、日本初の民間社会福祉施設である社会福祉法人ねむの木福祉会の理事長、静岡県掛川市にある学校法人ねむの木学園の理事長、ねむの木養護学校の校長、特別支援学校ねむの木の校長などを歴任した。
吉行淳之介	作家、岡山県生まれ、東大英文科卒、『駿雨』で芥川賞受賞。 父は吉行エイスケ、母は吉行あぐり、女優吉行和子と作家吉行理恵は妹
手塚治虫	漫画家、アニメ監督、医師、マンガの神様と言われる、アニメ『千夜一夜物語』の美術監督をたかしに依頼する
辻信太郎	実業家、作家。山梨県職員を経て、株式会社サンリオを創業。同社代表取締役会長。
向田邦子	テレビドラマ脚本家、エッセイスト、小説家。第83回直木賞を受賞。
中沢洽樹	高知県生まれの聖書学者。1938年 東京帝国大学 文学部 宗教学科卒業。 暢の親戚で聖書学の分野で三笠宮様と旧知の間柄

3. 主な出来事

年度	柳瀬崇、小松暢の主な出来事	その他の主な出来事
1918	小松暢（こまつのぶ、旧姓；池田）、大阪府大阪市で生まれる。たかしと同学年	第一次世界大戦が終結
1919	2月、梁瀬崇（やなせたかし）、父；梁瀬清と母；登喜（*1）との間で、故郷の高知県香美郡香北町在所村で生まれる。このごろ、両親は上海にいたが、母親の希望で故郷にてたかしを出産。	パリ講和会議が開催される。ストライキが続発し、世情騒然としていた。

<p>1924 (大正 13年)</p>	<p>たかしが5歳のとき父親・清が東京朝日新聞特派員記者として中国の広東で三十三歳にて客死した。母親・登喜は父親の任地に同行せず、子供と一緒に故郷の実家に残っていた。たかしは父親の死後しばらくして、母親と祖母と三人で高知市に出て借家暮らしを始める。弟の千尋は南国市後免で開業医をしている伯父・梁瀬寛(清の兄)の養子になる。</p> <p>母・登喜は全力を挙げて自活の路を探る。ミシンを踏んで洋服を縫い、茶の湯、生花、盆景、謡曲、琴、三味線と、習い事でほとんど家にいなかった。映画や芝居が好きで、たかしは夜に良く母親に連れられてそれを見にいった。母親がスクリーンの男優を見て「いいわね」と感に耐えたように歓声を漏らしたとき、普段の母とは違う女性そのものを感じて子供心にドキンとしたことがある。</p> <p>母・登喜は香水の匂いが強く、派手好みだったから、人眼につく方だった。母親のまわりにはいつも何人か男性がいて、その事について、また濃い化粧について、たかしはいろいろな人から母親の悪口をさんざん聞かされるのがいやでたまらなかった。たかしは母親を信じていたし、よその子の母親よりきれいだと思ってうれしかった。留守がちな母親に代わって祖母が面倒をみてくれた。祖母は添い寝をしながら「この世の中で信用できるのはお前と神様だけだ」とよく言った。過保護に育てられ、貧しいくせに世間知らずのお坊ちゃんになってしまったとたかしは思っている。</p> <p>(アンパンマンの遺書より)</p>	
<p>1926 (大正 15年/ 昭和元 年)</p>	<p>たかしが小学校二年生の時に母が再婚したため、弟が既に養子になっていた高知県南国市後免町の伯父の家に小学校から中学校にかけて引き取られた。たかしは「あなたは身体が悪いから、大きくなるまで病院で預かってもらうのよ」という母親の言葉をそのまま信じていた。そしてここでもさんざん母親の悪口を聞かされたが、たかしは母親をすこしも恨んでいなかった。(アンパンマンの遺書より)</p>	
	<p>たかしは高知市内の県立城東中学校(現追手前高校)に進学する。</p> <p>井伏鱒二の『夜ふけと梅の花』に出会い、井伏鱒二はたかしの創作の原点となる。</p>	

<p>1937 (昭和 12年)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・田町にある東京高等工芸学校（*2）に入学。 長兄の伯父・寛は一家全部の兄弟姉妹の面倒をみてくれた。伯父はたかしに「医者学校へ行く気はないか。学費は出す。病院もお前に譲ってもよい」（弟・千尋が既に医者を目指さないと分かっていた）と言ったが、たかしは自分の成績を考慮し無理だと思ったので断った。伯父が「図案なら飯が食える」と言ったので、東京高等工芸学校図案科と京都高等工芸学校図案科に絞り、結果、田町にある東京高等工芸学校図案科に合格できた。数学が不得意だったので、問題集五百題位を丸暗記していたが、全問、見覚えがあった。それで合格できたと思う。 ・暢、このごろ大阪の阿倍野高等女学校に入学する。女学校時代の暢は足が速く、『韋駄天のおのぶ』というあだ名がついていたといわれる。活発な女学生が浮かぶ。当時、女学校に進学するのはかなり裕福な家柄だった。 ・工芸学校は自由主義の申し子で、担任の杉山豊先生は「ココは銀座に近い。一日に一度くらいは銀座に出て散歩するがいい。そこで吸収できるものは、学校で習うものより栄養になる。図案科に入ったからと言ってデザイナーにならなくてもいい。何でもいい」と言ったので、たかしは先生の教えを守って毎日銀座に出て深夜まで真面目に吸収した。デッサンさえも碌にせず、ヌードを描くときだけ熱心に出席した。 ・たかしが卒業制作の真っ最中に「チチキトク、スグカエレ」の電報が来た。せめて一枚のポスターを仕上げからと思ひ、徹夜で仕上げ、翌日の汽車で帰った。やっと帰りついたとき、父はすでに亡くなっていた。父というのは、本当は伯父で義父でもなかった。しかし、お父さんと呼んでいた。実子でもないたかしの望むままに東京に遊学させ、海のものとも山のものとも知れない芸術の道に進むことを許してくれた。どんなに感謝しても感謝しきれない。「兄貴遅いよ」と弟・千尋になじられたが、一言も返せず、とめどなく涙が流れてとまらなかった。田辺製薬の宣伝部に就職が決まっていたが、愚かなことに、製薬会社に勤めれば父の病院に薬を安くまわせるかもしれない、少しは役にたてるだろう、と考えたのである。父に田辺製薬に就職すること 	
------------------------------	--	--

	を報告したとき「田辺製菓か、しょうもない会社に入ったな」と言われた。(アンパンマンの遺書より)	
1939 (昭和 14)	たかし 20 歳、東京高等工芸学校卒業し、銀座に近い日本橋にあった田辺製菓(宣伝部)に就職。イラスト描き、デザインもできる便利屋として重宝がられる。会社が引けるといそいそと不夜城の銀座に寄り、夜遅くまで銀ブラをする日常であった。	
1941 (昭和 16)	・たかし、徴兵される。北九州の野戦重砲七十三部隊に入る。戦地では暗号作成や宣撫工作(地元民への広報活動)を担当	・12月、太平洋戦争勃発
1942	・たかしは中国の福州に上陸、間もなく上海に移動する。暢はこのごろ上京し、日本郵船勤務だった高知県出身の小松総一郎と出会い結婚するが、夫はすぐに徴兵で招集される。	
1945	・出征した暢の夫・小松総一郎は無事に帰還するが、間もなく病死。 ・8月、たかしたちは上海の郊外、四溪鎮で敗戦を迎える。そこがそのまま収容所だった。海賊もやって来るので武装解除されなかった。 ・未亡人となった暢は高知新聞社の求人に応募し採用される。 暢はジープを乗り回し、焼け跡を取材するために走り回っていた。趣味はスキーや登山で動きまわるのが好きだった。	・8月15日、太平洋戦争終戦
1946 (昭和 21年)	・3月、たかしたちは送還命令が出て武装解除され階級章もはずして上海に集結。 幅員し高知の南国市の後免町にある実家に帰る、家族が無事と分かるが弟が海軍特攻隊としてフィリピン諸島沖で戦死したことを知る。 ・たかし、帰郷後しばらくは同郷の戦友の誘いを受けて屑屋の手伝をしていたが、3か月ほどして高知新聞社に入社し社会部の編集部配属される。 ・『月刊高知』という月刊誌が創刊されることになり、スタッフは編集長が青山茂、一年先輩の品原淳次郎氏とやはり一年先輩の女性記者小松暢とたかしの四人である。たかしは雑誌の編集をすることになり、記事をとる、インタビュー	

	<p>一、座談会の司会もすべて経験する。イラスト、まんがを描き、活字指定から組み版レイアウトまで覚え、その後の仕事にとっても役立つことになる。</p>	
1947	<p>・暢と恋に落ちる (*3)。</p> <p>・やがて暢は弁護士の秘書(*4)になることで上京し、半年後にたかしが暢を追って上京する。そして結婚する。</p>	<p>手塚治虫の『新宝島』が出版され、四十万部とか八十万部ともいわれる空前の大ヒットとなる。当時の漫画少年のすべてにはげしい衝撃を受けた。石ノ森章太郎、赤塚不二夫、藤子不二雄等々は手塚治虫の影響を大きく受けて育っていく。しかし既成の漫画家の手塚に対する評価は低かった。ほとんどの人は誰ひとり認めていなかった。が、子供たちは認めた。手塚治虫は子供たちの神様であった。</p>
1948 (昭和23年)	<p>・たかしが日本橋三越で戦後第一回の日本広告界展に応募し、デパートの部の部会賞に入選する。ちょうどそのとき三越が宣伝部員の募集をしていたので応募し、日本橋の三越宣伝部に入社する。</p> <p>面接で「生意気な奴だ」というので落とされたが、高知出身の重役・井上慶吉がいて「俺が補償するから合格にしてくれ」と頼んだことで採用された。入社後、井上慶吉から「俺の顔をつぶさないでくれよ」と説教される。</p> <p>・三越劇場があり、そこで文学座、俳優座、民芸、文化座、その他の作品が絶えず上演されていて、そのポスターを随分描くことになる。</p>	

	<ul style="list-style-type: none"> ・三越の包装紙のデザインを一新することになり、猪熊弦一郎（*5）に依頼する。たかしが作品を取りに行く。そのとき猪熊弦一郎にロゴ（が無かったので）をお願いしたが、「君が書いてくれ」と言われた。猪熊がデザインし、たかしがレタリングの「mitsukoshi」のロゴが入れられた包装紙は、「華ひらく」の名で半世紀以上使われている。 	
1949	暢は、このごろ社会党の代議士秘書から転じて創設された日本自転車振興会に勤めていた。	
1953	<ul style="list-style-type: none"> ・たかし、三越を退社し専業漫画家となる。暢は平然として「やめなさいよ、なんとかなるわ、収入が無ければ私が働いて食べさせる」と言っていた。 たかしは三越に在職中から、独立漫画という団体に所属し、ぼつぼつ漫画を描いてセミプロみたいになっていたのので、仲間の中では金廻りがよく（副収入が給料の3倍くらい）、新宿区荒木町に四十二坪の借地に二階建ての家を建て、電話にひいてこれで良しというところで退職した。 ・ある日、NHKがたかしのところに来て「今度漫画学校という番組をつくるが司会者として出演してくれませんか」と。「司会なんてしたことはないので駄目ですよ」と。それでは司会は別にたてるとして、漫画学校の先生ということでどうでしょう」と。引き受けることになり、司会は立川談志に決まった。この番組がひとつの転機となった。大人用の漫画しか描いたことがなかったのに、子供向の雑誌から注文が舞い込むようになった。これがアンパンマン誕生への伏線となる最初の出発点になった。 	
1954 （昭和 29年）		手塚治虫がトキワ荘十四号室に入る。ここで『鉄腕アトム』や『ジャングル大帝』を描き続ける。
1955	<ul style="list-style-type: none"> ・宮城まり子 <p>詳細な時期は不明だが、この頃に大スターだった宮城まり子から、たかしに電話がかかって来た。『漫画読売』の仕事でたった一度インタビューしたことがあるだけだったが、有名俳優からの私的な電話なので、たかしは感激した。「やなせさん、お願いしたいことがあるんや。来てくれへんか。</p>	宮城まり子の『ガード下の靴みがき』が大ヒットする。

	<p>車をまわすからうちに来てほしいんや」と独特の甘えるような声だったので、たかしはフラッとして引き受け、さしまわされた高級車に乗って宮城まり子のお宅を訪問した。宮城まり子に「御飯でも一緒に食べようよ」と言われ、たかしは食べたが、スクランブルエッグと塩鮭と、味噌汁に漬物という女学生の下宿の献立のような普通の料理なので、たかしは凄いと思った。ほとんど鼻つき合わせて食べるので、これにはやられてしまった。ぐっと親近感が増して、この人のためなら何でもしようと思ってしまった。仕事の内容は（*6）参照。</p> <p>後年たかしは「仕事を通して、ぼくには別に師匠はいない。全ての人が師匠である。しかし、ひとり選ぶとすれば或いは宮城まり子かもしれないと思うようになった。構成も、作詞も、演出も、僕は宮城まり子さんに教えてもらった。別に講義は聞かなかったが、見て覚えた。今眼の前にいる観客のハートをつかむということでは天才的な人だった。しかし、のちに（1960年）吉行淳之介と恋に落ちて一緒に暮らすようになろうとはたかしの想像を絶していた」。</p>	
1956		谷内六郎が第一回文藝春秋漫画賞を受賞。
1860 （昭和35年）	<p>・『見上げてごらん夜の星を』</p> <p>永六輔が突然たかしのところに来訪してくる。「今度大阪のフェスティバルホールで労音ミュージカル『見上げてごらん夜の星を』をやります。それで舞台装置をやなせさんをお願いしたいんです」と。「ぼくは舞台装置なんかやったことがないし」と口ごもっていると、「大体の設定はぼくがやりますから、それじゃーお願いします。スタッフ会議に出席してください。」と勝手に決めて風のように行ってしまった。作・演出；永六輔、作曲；いずみ・たく、照明今井直次、美術；やなせたかしであった。『見上げてごらん夜の星を』は大成功であった。</p> <p>いずみ・たくとは彼が死ぬまで生涯の友として付き合うことになる。</p> <p>・たかしは永ちゃんとの交友を通じて、知り合った青島幸男、前田武彦もあつという間に売りだしていった。</p>	<p>・宮城まり子が吉行淳之介と同棲生活を始める。吉行には妻がいて離婚に応じなかったもので、結果、35年間事実婚であった。</p>

1961	<ul style="list-style-type: none"> ・『手のひらに太陽を』 たかしが作詞し、いずみ・たくが作曲した『手のひらに太陽を』を発表、童謡として広く親しまれる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手塚治虫がアニメ制作会社「虫プロダクション」を発足させる ・永六輔がNHKで始まった音楽バラエティ番組「夢であいましょう」の制作・構成を手がけ、音楽とコントを取り合わせて当時としては大変垢抜けた画期的な番組として人気を博した。 ・この番組からは渥美清、坂本九、黒柳徹子、初代ジャニーズ、E・H・エリックといった多くの人気者を輩出している。
1963		虫プロの『鉄腕アトム』をフジテレビが放映を開始する
1964 (昭和39年)	<ul style="list-style-type: none"> ・『まんががっこう』 たかし、司会が立川談志のNHK『まんががっこう』の先生役になり3年間務める。 ・伝説のTVドラマ『ハローCQ』 面識がない、『映画の天才』と称された映画監督の羽仁進からたかしに電話がかかって来て「一年間連続のテレビ映画をつくるが、シナリオをお願いしたい」と。「シナリオは描いたことが無いのでお断わりします」と。「それなら企画会議だけでも出席してください」と。題名は『ハローCQ』であった。皆にラフストーリーを出してくださいと言われ、提出したら第1作目に採用されてしまった。テーマソングの『ハローCQ』の作詞をして当時まだ無名だった今陽子が歌 	東京オリンピックが開催される

	<p>った。この番組は1年続いたが三分の一はたかしがシナリオを書いた。</p>	
<p>1967 (昭和 42年)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・たかしの詩集『愛する歌』 辻信太郎（(*7) 社長の山梨シルクセンター社（後のサンリオ）より発売 ・ラジオドラマ『やさしいライオン』 <p>文化放送の番組の穴を埋めるためにたかしが三日間で仕上げ制作</p> <p>（テレビドラマ『アンパン』の八木信之介上等兵の实在モデルは戦時中の小倉連隊の新屋敷上等兵と、戦後たかしと暢におおきな影響を与えるサンリオの辻信太郎ではないかと言われている、八木が九州コットンセンターの経営者となる）</p>	<p>虫プロの劇場版『ジャングル大帝』でベネチア映画祭サンマルコ銀獅子賞を受賞。</p>
<p>1969</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・『やさしいライオン』の絵本 <p>たかしと親交のあった合唱団・ボニージャックスが『やさしいライオン』を絵本にする企画をフレーベル社に持ち込み、出版しベストセラーとなる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アニメ『千夜一夜物語』 <p>虫プロダクションの劇場アニメ『千夜一夜物語』制作の際に、エロチック路線を求めていた手塚治虫は、たかしの漫画を気に入り美術監督として招き入れた。「虫プロは子供のアニメのキャラクターに慣れているので、大人漫画の人に依頼することになり、いろいろと人選した結果、やなせさんに決定した」と言われた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アニメ『やさしいライオン』 <p>同作がヒットしたお礼として、手塚治虫から「私のポケットマネーで、短編を自由につくってください」といわれ、たかしは1967年に手掛けたラジオドラマ『やさしいライオン』をアニメ映画化したが、毎日映画コンクールの大藤信郎賞を受賞し、最優秀動画賞、教育映画賞とかを受賞した。同作はたかしの代表作のひとつとなった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・虫プロのスタッフ百八十人がかかった。中小のアニメスタジオに外注して延べ八百人が参加した。 <p>大ヒットする。</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ・最初の『アンパンマン』 <p>雑誌『PHP』で連載していた『十二の真珠』という大人向けの短編童話の中で『アンパンマン』を書く。太り過ぎのカッコ悪いおじさんが空を飛んで戦地に赴き子供たちにパンを配るが、国境を超えるときに未確認飛行物体と間違えられ撃ち落とされるという大人向けメルヘン。</p>	
1971		向田邦子・テレビドラマ『時間ですよ』の脚本を開始
1972 (昭和47年)	<ul style="list-style-type: none"> ・ミュージカル『アンパンマン』 <p>或る日、いずみ・たくから電話があり「やなせさん、アンパンマンのミュージカルにしようよ」、「ええっ！本気ですか」で、急いでシナリオを書き、主題歌を書いた。いずみたくは笑い「やなせさん、これや当たり前みたいな歌ですね」。こうして知らない人は知らないミュージカルの最初の上演が始まったが、その後シリーズとしていずみ・たくが死んでしまうまで二十年間、延々と母子公演として続くことになるうとは夢にも思わなかった。</p>	
1973	<ul style="list-style-type: none"> ・文芸誌『誌とメルヘン』の創刊 たかしが編集長で山梨シルクセンター社（この年にサンリオに社名変更）が出版 ・『漫画家の絵本の会』の立ち上げ たかしが馬場のぼるらと立ち上げる ・『アンパンマン』絵本の誕生 詩人・絵本作家としての活動を本格化させる。1969年発表したアンパンマンを子供向けに改作し、フレーベル館の月刊絵本『キンダーおはなしえほん』の一冊「あんぱんまん」として発表。同作は当初評論家、保護者、教育関係者からバッシングを受けた。元は大人向けに書いた作品だったが、次第に、幼児層に絶大な人気を得るようになっていった。 	
1974		・サンリオがキャラクター・ハローキティを販売開始

		・向田邦子・テレビドラマ『寺内貫太郎一家』の脚本を開始
1975	絵本の続編が『それいけ！アンパンマン』と名を改めて刊行	
1978 (昭和53年)	<p>・向田邦子のエッセー『父の詫び状』の挿絵を向田邦子の依頼で描く。</p> <p>たかしは言う「以前ぼくが『映画ストーリー』(1952年～1965年)にシネエッセーを連載していたとき原稿を取りに来ていたのがベレー帽をかぶった眼の大きな女の子で、「やなせさんの原稿は面白いから、毎号読むのが楽しみ」とお世辞を言った。気が合っであっちこっち一緒に展覧会を見に行っった。『映画ストーリー』廃刊後に、新たな仕事としてシナリオを書いているのを知って『ハローCQ』にも推薦して二本ばかり書いてもらった。そして(この年に)挿絵を依頼されることになる。ハローCQにも原稿を書いてもらった。これが後の向田邦子さんで、その後ものすごい流行作家となり直木賞を受賞した」</p>	
1980		向田邦子が『思い出トランプ』収録の『花の名前』『かわうそ』『犬小屋』で第83回直木賞を受賞
1981		向田邦子、台湾で取材旅行中に飛行機事故で死去
1988	<p>・このごろ、暢が体調を崩す。診断を受けると乳がんだった。緊急入院し、手術が終わって、たかしは担当の医師に別室に呼ばれ、「御気の毒ですが、奥様の生命は長く保ってあと三か月です。全身に癌が転移しています、第四期の終わりで、転移している肝臓はもう手術できません」といわれ、たかしは全身から血の気が引いた。「カミさんがやせてきたこと、頬にシミが出来たことは気になっていたのに、もっと早く病院に連れて行けばと悔やんだ。</p> <p>・術後、ふたつの乳房を切除するという壮烈な手術に耐えて、骨と皮みたいになった暢に「先生からはどんな話だった</p>	

の？」とたかしは聞かれて、「うん、先生は悪いところは全部切り取ったから大丈夫だよと言っていたよ」、「私駄目かもしれない。覚悟はできているから本当のことを教えてね。整理しておかないと、あなたじゃ解からないから」、「すぐに退院できるよ。頑張れ！」

・退院後の病状については（*8）参照

・たかしは言う「カミさんと僕は反対の性格である。アグレッシブできっちりとしていて努力家である。世事にうとく、だらしなく、整理整頓ができず、不器用という欠点のかたまりの僕にとっては有難い存在だった。僕は自分の仕事以外は、全部カミさんに頼っていた。散髪も時にカミさんにしてもらった。僕が病気になると、自分の髪をばっさりとショートカットにして、全力をかたむけて看病してくれた。実に頼りがいがある。

・たかしが暢のプロフィールを書いているが、その一部を紹介する。

- ① 山に行かないたかしに「山はいいわよ、気持ちがスーッとするわ。本当にあなたはヘンな人ね。理解できないわ」そして北海道に二十日間ばかりかけて道内の山を歩きまわった。
- ② カミさんは四十五キロ、小柄で細身である。もっと若いころは顔面蒼白という感じで、武久夢二風で、いつも病気ではないかと学校の先生に注意されていた。ところが短距離選手であり、イダテンノブと異名をとるほど鉄火風なのだ。もっとも最近は何を取って血色がよくなり肥えてきたが、それでも年齢にしてはほっそりしている方だ。これがエイとばかりに巨大なバッグを背負う。うまくかつげるのが不思議と思い、たかしもかっぴでみたが、重きに泣けて三歩あゆまずという状態であった。
- ③ 暢は旅行に行つて、「ここはステーションホテルに泊まろう」などとやっている。ステーションホテルというのは駅のベンチでごろ寝することだ。たかしは「私がまったくしないことをするヤマノカミだから私は好きなのだ。ヘンに上品な女でなくて本当に良かった」と思う。
- ④ 暢が「でもね、私、一生に一度でいいからあなたが全部計画して、私はただ黙ってついていくような、そんな世

	<p>間普通の奥さんみたいな旅行をしてみたいわ」、「うん、やってみるか」とたかしは逆らわずに言ったが、実現するときとがっかりするはずだと思った</p>	
<p>1989 (昭和64年/平成元年)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・テレビアニメ『それいけ!アンパンマン』が放映が開始される。テレビ業界的にかなり不安視されており、スポンサーが少なかった、数局のみの放送、昭和天皇の病状悪化による自粛ムードの最中での放送開始などと逆境を余儀なくされるが、まもなく大人気番組となり、日本テレビ系列で拡大放映された。キャラクターグッズなども爆発的に売れ、たかしは一躍売れっ子になった。 ・小学館の幼児向け雑誌でアンパンマンの連載が始まる。藤子不二雄の『ドラえもん』と同じステージに並ぶことになり、表紙にも登場した。アニメの人気者が表紙に並ぶ。たかしは70歳にてはじめて、いくらか陽の当たる場所に登場したので気恥しいと思う。アンパンマンは従来のテレビアニメの常識から外れて、コミックの世界ではなく、絵本とメルヘンの世界から登場した。たかしは幼児漫画の世界に飛び込んでうろたえていたが、それにもまして仰天したのは連続テレビの世界。最初の頃は原作を提供し、ラフストーリーを毎週作っていたが、あつという間にストックがなくなってしまう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2月、巨星手塚治虫が63歳で胃癌のため死去
<p>1990 (平成2年)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・6月、たかしが日本漫画家協会大賞を受賞。考えていたよりもはるかに大きな反響があった。支障をきたすほどのインタビューの申し込みもあった。仕事が増え収入が10倍くらいになった。が、こずかいも相変わらずでジープンをはいて地下鉄を利用していた。 ・たかしは、もう時代からズレてしまっていると思いながら、大友克洋の『アキラ』、宮崎駿の『風の中のナウシカ』から『紅の豚』にいたる一連のアニメ、さくらももこの『ちびまるこちゃん』に大いに感心した。 ・暢は元気だったが、時々膝が痛いというので、遂に骨にきたかとたかしは恐れたが全身転移していることはどうしても言えなかった。気丈だから、かえってポキンと気落ちするのが怖かった。 	

	<p>不安ながらもまずまず天下太平で、暢は銀行やデパートでちやほやされるし、お茶（茶道）の方も順調で裏千家の参与になり、それなりに忙しい毎日を送っていた。</p> <p>たかしは、後で考えたときこのあたりが一番良かったのかもしれないと思う。</p> <p>ただ、暢が心配で旅行や地方講演の仕事はことわった。</p>	
1991	<p>4月、たかしが勲四等瑞宝章受章、皇居で記念撮影をした。（*8）</p> <p>・11月、園遊会に招待され、カミさんと出席した。（*8）</p>	
1992	<p>・たかしは、地元高知で行われていたひとこま漫画の大会「まんが甲子園」には立ち上げ時から深くかかわり、晩年まで審査委員長を務めた。</p> <p>・文部大臣賞</p> <p>が新たに制定され、たかしは手塚治虫と一緒に受賞。</p>	<p>・『アンパンマン』ミュージカルの一番最後の第六話『アンパンマンと勇気の花』の挿入歌『すすめ！アンパンマン号』はいずみたくの遺作となった。口でメロディを歌い妻の庸子が写譜した。GO！GO！と歌いながら前のめりに倒れこの世を去った。</p>
1993 （平成 5年）	<p>・5月、カミさんの余命はあと2か月だったが、このときはまだ来年の正月は越せると確信していた。そして仕事を忙しくしていた。</p> <p>・11月、女子医大に再入院した。放射線治療で貧血が酷くなり輸血しなくてはいけなくなった。暢は「今度退院したら、貴方のいうとおりにするわ」（丸山ワクチン）そう言って入院した。毎日見舞いに行ったが、ベッドのまわりにはアンパンマンの手ぬぐいやTシャツが沢山おいてあり、看護婦さんや見舞客に配っていた。</p> <p>・11月22日、暢があこの世に旅立つ</p> <p>ほとんど何の苦しみもなく、暢は75歳で旅立った。カミさんは「葬式も告別式もしないでね。みんなに迷惑をかけるから」と言っていたので、ほんの身内だけで一切をすませた。</p>	

	・たかしは天涯孤独となる。	
1994	6月、四谷の舟町にアンパンマンショップ一号店を開店	
1996	<ul style="list-style-type: none"> ・7月には出身地の高知県香美市に香美市立やなせたかし記念館「アンパンマンミュージアム」が開館 ・地元高知で行われていたひとこま漫画の大会「まんが甲子園」には立ち上げ時から深くかかわり、晩年まで審査委員長を務めた。 ・柳瀬家の出身地、高知県香美郡北町美良布にアンパンマンミュージアムがオープンする。オープニングには里中満智子、ちばてつや、サトウサンペイ、いがらしゆみこ、その他有名漫画家数十人が参加、高知ホリディンでの前夜祭には声優の戸田恵子（アンパンマン）中尾隆聖（ばいきんまん）その他に皆さんも交えてシンデレラのパロディみたいなショーをやった。 	
1998	<ul style="list-style-type: none"> ・同記念館内に雑誌「詩とメルヘン」の表紙イラストやカットなどを収蔵した「詩とメルヘン絵本館」が開館するなど名声が高まっていった。官庁や地方自治体、公益事業や業界団体などのマスコットのキャラクターデザインを懇請され、無償で引き受けることも多くなった。 ・前述の「詩とメルヘン」編集長時代も初期はほぼノーギャラで引き受けていた。 ・10月、『アンパンマン』のテレビ放映が決定 	
2000 (平成 12年)	<ul style="list-style-type: none"> ・7月、富良野にアンパンマンショップ二号店を開店、たちまち超満員になったので、翌年面積を4倍にし、前庭にアンパンマンキャラクター群の石像を並べてミニパークにする。 ・日本漫画家協会理事長に就任。結果を残すことが出来なかったが、懸案事項は「ストーリー漫画以前の漫画家と以降の漫画家の収入格差をいかに解消するか」だった。たかしは自社ビルに日本漫画家協会を家賃タダで入居させていた。 	
2001	自作のミュージカルを初演	
2003	・同ミュージカルの延長線上で、作曲家「ミッシェル・カマ」（たかし）、歌手・やなせたかしとしてCDデビュー	

	<ul style="list-style-type: none"> ・30年間編集長を務めていた『詩とメルヘン』が休刊となる ・幼稚園から短期大学までの一貫教育の高知学園の名誉学園長に就任 	
2005	財政難を理由に『まんが甲子園』入賞校へ贈る賞金の半減を打ち出した高知県に対し、たかしが総額200万円の資金提供を申し出ている。	
2007	・たかし、季刊誌『誌とファンタジー』を立ち上げ、たかしが責任編集を務める。	
2011 (平成23年)	<ul style="list-style-type: none"> ・商業的価値をランク付けするキャラビズ情報(株式会社キャラクター・データバンク調べ)の「(日本における)キャラクターランキング100」でたかしが第1位となった。「 ・東日本震災直後「アンパンマンマーチ」が復興のテーマソングのような扱いをされたり、「笑顔を失っていた子供たちがアンパンマンを見て笑顔をとり戻した」といった良い話がやなせの元に届いたことから、引退を撤回したという。 ・その後、たかしは被災地向けにアンパンマンのポスターを制作したり、「奇跡の一本松」をテーマにしたCDを自主制作するなどした。 	
2012	6月の日本漫画家協会賞の贈賞式を最後に、たかしは高齢と体調不良を理由に日本漫画家協会の理事長を辞任して会長に就任。後任の理事長は ちばてつや	
2013 (平成25年)	<ul style="list-style-type: none"> ・7月6日に行われた劇場版アニメ『それいけ!アンパンマンとばせ!希望のハンカチ』の初日舞台挨拶でたかしは「なんとか今のところは死なないでいるんだけど、まもなくだね。病院からはあと2~3週間しか生きられないって言われている。死ぬ時は死ぬんだよ。笑いながら死ぬんだよ。そうすれば映画の宣伝になる。死ぬまで一生懸命やるんだよ」と笑いながら語る。 ・8月、体調を崩して入院する ・10月13日、午前3時8分、心不全のため東京都文京区本郷の順天堂大学医学部附属順天堂医院で逝去。94歳没 	

*1. たかしの母・登喜

登喜の父親出身の谷口家は高知県香美郡在所村永野の大地主で村長をする名家で、父親・谷内保定は大阪に渡り、当時の商社「鈴木商店」に勤めていた。

登喜は谷内家の次女で裕福な家で育ち阿倍野高等女学校（現大阪府阿倍野高等学校）を卒業している。高等女学校在学中に一度豪商と結婚したが長続きしなかったとされる。そしてたかしの父親の梁瀬清と再婚する。長男崇、次男千尋の二人を産む。夫・清が33歳で亡くなってから生活が困窮し、親戚を頼って高知に引っ越し、洋裁をしながら生活を支える。次男の千尋は医者で子供のいない伯父・柳瀬寛の養子として引き取られ、登喜はたかしとたかしの母方の祖母・谷内鉄と3人で医者の子供を借り住むことになる。登喜は映画や芝居が大好きで、たかしを映画館によく連れて行った。たかしはこのころ自分の家が貧乏だと知らなかったとたかしは述懐している。

登喜は2度目の再婚をすることになり、相手は東京在住の官僚で、子供のいる家庭だったので、たかしを連れていけなくなって、たかしは梁瀬寛に引き取られることになったとされる。

*2. 東京高等工芸学校工芸図案科

現在は千葉大学の建築科の中にわずかに痕跡が残っていて、たかしの名前は千葉大の卒業名簿に記されているが実際には消滅したのと同じ。当時の学校は山手線の田町駅にほとんどくっつくように建っていた。たかしは自由で楽しくて面白かったと思っている。先生が一日に一度は銀座に行けというので、たかしは毎日銀座学校に通った。銀座が大好きだった。

*3. 小松暢と恋に落ち、結婚する



- ① 東京出張時、四人が闇市の屋台で買って来たおでんを食べ、竹輪とツミレを食べなかった暢を除く3人が食中毒を起こす。暢が夜も寝ずに看病し献身的に尽くした。いち早く回復した たかしは暢と二人で荷物の整理、原稿を送る等の雑用をすべて

やったが、この共同作業がたかしは嬉しかった。「暢のテキパキとした行動と、快活な愛らしさにたかしはすっかり魅了された。それに同年だけど暢は童顔で歳よりはるかに若くみえ美しかった。

- ② 編集室に年齢 30 歳前半ごろの和服姿の女性が足繫く訪問するようになる。暢のところへ夏には貴重品の西瓜、秋には蜜柑という風に土産を持ってきた。たかしにはその女性が誰か分からなかったが、ある日暢と二人で取材に出かけたとき長身で仕立てのよい背広を着た紳士とすれ違ったが、その紳士が暢にていねいに挨拶をした。暢は「よく西瓜を持ってやって来る女性のお兄さんで、求婚されている」と告げた。たかしは「ついに恋敵が表れたか、敵の方がはるかに優れている」と思った。

西瓜の女性は、兄はいい年齢になったのに、どんな女性を紹介しても気に入らず、一生独身かと心配していたが、ある日「僕は理想の女性が見つかった。あの人とぜひ結婚したい」と言った。いわゆる人目惚れである。

『月刊高知』というのは、四人だけなので、皆が取材編集はもちろんのこと広告取りも集金もやった。暢は、広告代金を支払ってくれない商店に督促に行ったが、相手は言を左右して払ってくれない。元々熱血でジープに飛び乗って焼け跡の街を走り回る、土佐の方言で言えば「ハチキン」というおてんばの性格だから、手にもったハンドバッグを商店主めがけて投げつけた。見事に命中。「はっきりしてよ。払うの払わないの」。こうして代金は支払われたが、偶然ことの次第を目撃したのが、かの紳士で、外国暮らしが長く、日本の女性はおとなしすぎて気に入らなかったが、ここに意中の女性を見つけたと妹に告白したのが真相だ。

暢は「どうしようかしら」、

たかしは「いい人じゃないか、あの人と結婚すればいい」と心にもないことを言った。

その後、たかしと暢が取材帰りで夜の街を歩いていた。駅の近くだったが、ひどく暗かった。遠雷が鳴っていた。暢は「もっと雷が鳴ればいい」と言った。その次の言葉が聞こえにくかった。「やなせさんの赤ちゃんが産みたい」「え？」なるほどこれが殺し文句か。必殺のひと言でたちまち心は燃えあがり、抱きしめて、唇を重ねた。そして結婚しよう決心した。(たかしは以前ある女性と暗い公園を歩いているとき、「殺し文句を言って」と言われたときにうまい殺し文句を思いつかず、「う、うん、なんていえばいいんだ」と考えているうちに明るい街に出てしまい、「あなたはいい人だけどダメね、さようなら」と言われた経験がある)

暢は「私先に上京してやなせさんを待っているわ」と辞表を提出してさっさと上京して行った。

それから半年してたかしも上京する。

*4. 社会党の代議士

代議士の名前が明記されていないが、当時、高知出身の社会党の代議士は佐竹晴記であり、1936年に初当選し7期衆議院議員を務めている。編集スタッフ四人全員で東京へ取材旅行に行ったときに佐竹代議士にインタビューしている。

*5.猪熊源一郎と三越の包装紙

○三越の包装紙

たかしは「三越の包装紙のデザインを新制作派の花形画家でアメリカ帰りの猪熊弦一郎に依頼することになり、田園調布のお宅にうかがった。キリハリをノリづけした作品をいただいたときには正直あんまりいいとは思わなかった。しかし包装紙を制作して品物を包んでみるとものすごく効果的だった。包装紙のひとつの革命になった。『MITUKOSHI』というローマ字のレタリングはぼくですが、今でもあの文字は社員バッジにも使われている」と著書に記述している。以前テレビ番組でたかしが「作品を取りに猪熊弦一郎の自宅を訪問し、レタリングが記入されていないので書いてください」とお願いしたら「君が書いてくれ」と言われて自分が書いたと述べていた。

・たかしが社長室に持っていくと、そこには社長と店長と重役がずらりと並んでいて、重役一同は怒りだした。「いつも精神誠意仕事をやれと言っているのに、なんだこの雑な仕事は、ノリづけくらいちゃんとしたらどうだ。キリハリというのは手抜きじゃないか。きちんと絵具で塗り給え。「あもう」「なんだ?」「これはぼくのデザインでは無くて、新制作派の猪熊弦一郎先生の作品です」「なに、猪熊先生、うーん、そういえばいいなあ」たちまち態度が変わった。外部の権威と名声には弱い。重役一同、回覧しているが「ちょっと大胆過ぎませんか」などとぼそぼそ言っている。社長が鶴の一声、「いいじゃないですか。決めましょう」



「これが戦後の街に旋風を起こした三越の包装紙である。その他のデパートも追随するように包装紙を一新したが三越を抜くものはでなかった。全国的に似たようなデザインが大流行した。さすがに猪熊画伯である」とたかしは言う。

○猪熊弦一郎のプロフィール

昭和期の洋画家。新制作協会創立会員。

・丸亀東幼稚園、城北小学校に通う。小学校の時から絵がうまく、学校の美術の授業で教師の代わりをする事もあった。

・1921年 - 旧制丸亀中学校（現・香川県立丸亀高等学校）卒業。

・1922年 - 東京美術学校（現・東京芸術大学）洋画科に入学し、藤島武二に師事する。のちに同学校を中退。

「絵を描くには勇気がいる」とよく口にし、新しいものへ挑戦をし続けた彼の画業は多くの人の心を捉えている。

丸亀市にある猪熊弦一郎現代美術館（設計：谷口吉生）には、猪熊の作品が常設展示されている。



・建築家・丹下健三が設計した香川県庁舎の壁画は、猪熊の作である。

・母校・丸亀高等学校に多くの作品を寄贈している。

37 歳ごろの暢と愛犬ゴロ



*6. 宮城まり子の仕事

「宮城まり子が「あたし、今度はじめてリサイタルやるんだけど、その構成をしてほしいねん」「はあ？構成って何ですか」「歌と踊りを入れて簡単なストーリーでつなげばいいんや」「ぼくはやったことがないから」「私が教えるからその通りにやればええんや、」歌はもうできているから、テープ持って帰って聞いてみて」のような会話だった。おまけに「衣装もついでにデザインしてほしいんや」

宮城さんが登場したとき、自分が鉛筆でデッサンしたとおりの衣装だったので、えーっ！と思って感動した。リサイタルの時、客席に作家の高見順がいたらしく、後で宮城さんは「高見先生、泣いてはったよ」と言ったが、宮城まり子ファンは文壇にも沢山いて多くの作家の姿をその後何度も客席で見た。たとえば火野葦平、たとえば吉川英治、ジャーナリストにもファンは多かった。」とたかしは言う。

ぼくはそれから彼女のステージの構成をしたり、ホンを書いたり、たまには巡業にくっついて行ったりと、すっかりまり子オタクみたいなことをやっていたが、いろいろと学ぶことが多かった。その頃、僕の知っている作曲家はいずみ・たくだけだったので、引き合わせていくつかの仕事をした。『てのひらを太陽に』は作曲がいずみ・たくで最初に歌ったのは宮城まり子である。」とたかしは言う。

*7. 辻信太郎

○略歴

実業家、作家。山梨県職員を経て、株式会社サンリオを創業。サンリオ作品の原作・脚本を執筆するなどの創作活動も手がけている。日本文芸家協会・日本ペンクラブ会員

○たかしの詩集『愛の歌』

1961年頃、山梨シルクセンター（サンリオの旧社名）という奇妙な名前の会社の社長の辻信太郎と知り合った。社長といってもちっぽけな会社で、社長はよれよれのレインコートを着ていた。「やなせさん、この詩集をうちで出版しましょう」と言い出した。「でも出版部もないし編集者もない。それに第一、詩集は売れないと決まっています、普通五百部くらい。それも本人の仲間や知人くらいしか買いませんよ」、「出版部をつくりまします」。どうも正気の沙汰とは思えないが、本当につくってしまった。出版部の部屋もないし、大学を出たばかりの社員がたったひとりである。社長も六人くらいの社員も、自分の会社が何を売っているのかよく解らない。「とにかく金になるものは何でもやった」というメチャメチャな会社である。この頃は森永や不二家のお菓子の箱なんかをつくっていた。社長は学生時代西条八十の『蠟人形』を愛読していた詩人肌の文学青年で、これが後年サンリオ社の体質の根底になって、大ヒットするキティちゃんの誕生につながっていく。詩集といってもラジオの中でつかった歌でちゃんとした詩は一篇もない。社長は社員の反対を押し切って詩集『愛する歌』を出版。よく売れて総計10万部以上は売ったが、漫画の方はますます仕事が少なくなった。

○『詩とメルヘン』

山梨シルクセンターという変な名前の会社は、改名してサンリオになった。山梨を音読みにしただけである。改名しても有名ではなかった。コップとかスリッパとか人形とかを売っていたが、何をしている会社かよく分からなかった。ところが、イチゴの模様をつけたハンカチや小物が飛ぶように売れた。年商が倍々ゲームで売り上げが増えた。ある日、たかしが「社長、誌の本を作ってくれませんか。編集費は無料で僕が一人でやります」辻社長は「いいですよ、出しましょう」と。1973年、あっという間に『誌とメルヘン』は創刊された。本はよく売れた。『誌とメルヘン』はすぐに月刊誌になった。真似た類似雑誌が沢山出たが、残っているのは『誌とメルヘン』だけである。『詩とメルヘン』を出している会社ということで学生たちに人気が出て優秀な学生が応募してくるようになった。サンリオ社はこのとき精神の部分にひとつの核ができた。誌や童話の好きな辻社長の気質にぴったりと適合し、それがのちのキティの大ヒットにつながったと

思う。僕はこうしてライフワークのひとつをこの年に持つことが出来た」とたかしは言う。

*8. 暢の病状と勲四等瑞宝章受章

・カミさんの病気のことは誰にも言わなかった。仲間の会に出席しても一言も発せず、うつむいていた。この様子を見て心配した里中満智子が追いかけてきて「やなせさん、何があったの、私に話してみて」と言われ、たかしは暢の病気のことを打ち明けた。すると里中満智子は「私も癌だったの、手術するのが嫌で丸山ワクチンを打ち続けて七年目に完治したの。やなせさんも試してみて」。たかしは次の日、根津の日本医科大学へワクチンを貰いに行ったが、行列ができていた。手に入れたワクチンを日本女子医大に持って行って、「藁にでもすがりたいのです。ワクチン注射をお願いします」、医師は「解かりました。1週間経ったら打ちましょう。繰り返しますが効果はありません」と。

・1カ月してカミさんは歩けるようになった。僕は衰えてしまったカミさんを、昔よりももっと愛しいと思った。徒歩30分ほどの我が家まで歩いて帰った。カミさんは痩せ細ったまま年が明けた。カミさんは女子医大に通院し、近くの医院で丸山ワクチンを打った。そのうち驚くべきことに、カミさんは血色がよくなり、丸々と太ってきた。もしかしたら丸山ワクチンが効いたのかもしれない。しかし病院は抗がん剤が効いたという。

・カミさんはお茶の稽古を始めた。好きだった山歩きも始めた。さすがに山から帰ってきた日は寝ていた。

・1991年4月、春の叙勲で勲四等瑞宝章を受章した。



最初、たかしは気おくれしたが、カミさんと一緒になるべく記念になることをしたいと思ったので、素直に受けた。カミさんは美智子さんと身近にお会いできるのがうれしいと言って、当日着ていく訪問着の支度を始めた。いくらか肩のあたりにやつれが見え、たかしは辛かったが、全身に癌細胞が転移しているようには見えなかった。カミさんと一緒に写真を撮り、宮中に参内して勲章をもらった。移動するバスの隣のシートは三宅邦子さんだった。

・1991年秋の園遊会で、たかしが「アンパンマンをかいています」というと陛下が大笑いをされた。それで和やかな雰囲気になった。カミさんが、親戚にあたる旧約聖書学の中沢洽樹はその分野で三笠宮様と旧知であったので、その事を申し上げると三笠宮様は「あーっ」といってのけぞるようになされた。

・園遊会の後は、病状が安定しているように見えた。たかしはなるべくカミさんという時間を長くし、昔とは違う、別の愛しいという感じが強くなり、時々肩をもんだりした。しかしこのごろカミさんは丸山ワクチンを打つのを止めていた。このことに僕は気が付かなかった。うかつだったが、気がついたときにもう一度打つように勧めたが、「私は東京女子医大を信じるわ」といって聞かなかった。しかし抗がん剤の副作用は強く、髪の毛が抜け落ちて、カツラ無しではどこへも出られなくなり、食欲不振になった。しかしカミさんは翻意しなかった。

添付資料；『エンジン 01 in 市原』

○エンジン 01 とは

日本を代表する各分野の表現者・思考者たちが日本文化のさらなる深まりと広がりをもつことを目的に参集したボランティア集団。

年に一度地方都市で開催するオープンカレッジでは、会員を中心に有識者たちが集結し、その地域の方々と「知の交流」を行う。

○エンジン 01 in 市原

文化、芸術、スポーツから経済など、各分野の第一線で活躍する有識者たち150名ほどが市原市に集結

様々なテーマに沿った講座やイベントを3日間にわたり開催された。

場所代としての入場料は各講座800円で最初にホリエモンの講座が完売した。



さまざまなジャンルに渡る全 75 講座を 4 時限に分けて開催します。プログラムは公式ウェブサイトや各公共施設（市原市市民会館、市原市立中央図書館、公民館等）に設置していますのでぜひご覧ください。（写真は過去大会の様子）



3日間の締めくくりとして、夏野剛さん、田原総一朗さん、堀江貴文さん、前田裕二さん、茂木健一郎さんらが「AIがあれば政治家はいらない!？」と題してシンポジウムを行います。(写真は過去大会の様子)

○筆者が聴講した講座

① 林真理子と、とことん語ろう

作家/日大理事長；林真理子、脚本家；中園ミホ、女優・作家・歌手；中江有里

○林真理子

400人席が満席でした。

日大問題が騒がれていた時で、いろいろと話をされていたが、一つだけ紹介すると、マスコミ対応にはニコニコしながら応じているときの方が多いのに、「全テレビ局が私のブスツとしたときの同じ映像しか使わない。いつもマスコミが家の周りで張り付いているので、それを見つけると止めるのを聞かずに主人が出て行って追い払おうとする。主人は普通のサラリーマンですが」(C建設勤務と聞いたことがある)

○中江有里

子供の時から読書が好きで、今でも年に300冊ほど読書している。(市原市市民会館の講演で、「子供の頃、毎月おこづかいをもらったが、もらうと必ず本を買った。女優になるときに大阪から上京したが、本は年間で300冊ほど読んでいる」)

○中園ミホ

オーディションは毎日10人ほどやるがヒロインだけでも3300名ほどなので大変であり、頭がおかしくなることがある。

『花子とアン』の夫役のオーディションで、鈴木亮平が「遅れてきてすみません。娘を幼稚園に送ってきたのです」と切り出した。

夫役は花子の陰で控え目な役どころである。オーディション終了後の決定会議でなかなか決まらなかった。

私は鈴木亮平がどうして30歳過ぎまでブレイクしなかったのだろうと思った。最初の挨拶が誠実そうに映った。私が、鈴木亮平ではどうでしょうか?という、徐々に皆の同意を得て鈴木亮平に決まった。しかし今日ほどに大ブレイクをするとは思わなかった。

② エンジン 01 音楽堂

バイオリニスト/作曲家；川井郁子、ピアニスト；熊本マリ、NHK交響楽団特別コンサートマスター；篠崎史紀、オペラ歌手/ミラノスカラ座等で活躍；中丸美千絵、ピアニスト；横山幸雄

司会より、「今日、中丸さんは出ませんよ」と説明があった。この初日の講演に間に合わなかったことが翌日の別の講座（『成田空港と羽田空港のこれから』）で分った。中丸さんは「ヨーロッパから駆け付けてきた。コロナ禍の影響で予定していたフライトがキャンセルになったり、別の便も遅れたりしたが、何とか乗り継いで帰国した」。

中丸さんはソプラノ歌手で、若いころからヨーロッパでオペラ歌手として活躍し、当時プライベートジェット機という言葉が無かった時に、占有したジェット機でヨーロッパ各地のオペラ座等を転々として活躍されていたそうです。中丸さんの生歌を聴けず、とても残念でした。

川井郁子のバイオリンは圧巻でとても素晴らしかった。色白で長身の奏者が勝負服の真っ赤なドレスを着て、まるで踊るかのように奏でる演奏は今でも目に焼き付いています。司会が「美しいものは皆わかるんですね。拍手が一段と大きかったです」

川井さんは香川県の屋島中学の出身で、私も同校に2年まで在籍していたので親近感がわき、以前から注目していました。川井さんが徹子の部屋に出演した時に「小学校時代、通学路に蛇が出て来るような田舎に住み、当時バイオリンを教える先生がいなくて困っていたが、丸亀に帰国したバイオリニストがいることが分かり、丸亀まで毎日バスで3時間かけて習いに行きました」と言われていたので、バイオリンへの執念は大したものだと感心したことがあります。恐らく小学校は牟礼小学校だと思います。

③ 市原で…歴史の色んな話！

歴史学者；磯田道史、華道家；池坊美佳、市原市学芸員；忍澤成視
磯田さんの講演は以前にも拝聴したことがあり、歴史好きの私には格好の講座であったのですが、画像が無いので説明は省略します。

④ AI 会議

多くの若者（おそらく東京から来た学生や若者）が参加していたので、後期高齢者の私は場違いのように思われましたが、松尾豊東大教授が私の母校・丸亀高校の後輩であり以前より注目していたので、この講座を選択しました。

400人席の会場は満席でした。

講師

脳科学者；茂木健一郎、千葉工業大学学長；伊藤積一、東京大学名誉教授；河口洋一郎、東京大学院教授/AI研究の第一人者；松尾豊

○トピックス

・人工知能が人間に追いつくのは10年か20年であろう。AIが暴走しない方法も同時に研究していく必要がある。

・日本は AI 研究で欧米に遅れている。研究費をもっとつぎ込まなければこの状況は変わらない。

・AI で絵を描くことも研究している。

○茂木健一郎氏の誘導（聴講者に面白い話題を提供するために）されての松尾豊教授談

・内閣府の AI 戦略会議の座長をしている。（当時の）岸田首相が AI を学ぶために研究室に来ら、3 時間ほどおられた。

・研究室には 200 名ほどいる。

・オンライン授業を行っていて聴講生は 10,000 人ほどである。聴講生には中学生も高校生もいる。

（松尾豊教授は産学連携に積極的な研究者であり、現在は国の研究費を受け取っておらず、企業からの資金のみで研究費を賄っている。トヨタの子会社から 200 万円ほどの研究費を受け取ったのを契機に、現在は年間 3 億円ほどを企業から安定して受け取っている。自身の学内で会社を営んでいる。このようなことにより日本の AI 研究費を少しでも増やそうとしている）

（全て私の記憶の中での話です）

尚、「エンジン 02in 市原」が 2024 年に開催されました、「エンジン 03in 市原」が 2026 年 1 月 31 日と 2 月 1 日に開催されます。

参考資料

- ・やなせたかし著「アンパンマンの遺書」
- ・やなせたかし著「これじゃあ死ぬまでやめられない！」
- ・やなせたかし著「人生なんて夢だけど」
- ・やなせたかし著「絶望の隣は希望です！」
- ・やなせたかし著「痛快！第二の青春」
- ・ウィキペディア

以上